

(2) 知的障害が重度の自閉症幼児一例に対する要求表現の指導についての考察

川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学専攻 修士課程 ○柴田 祐樹

川崎医療福祉大学 医療福祉学科 寺尾 孝士

川崎医療福祉大学 医療福祉学科 重松 孝治

【要 旨】

1. 研究背景

自閉症児のコミュニケーションの障害はDSM-IV-TRやICD-10においても基本的障害の1つに挙げられている。そのため、自閉症の指導をする際に、コミュニケーションの指導を行っていくことは重要であると考えられる。その指導において、世界的にも注目されているTEACCHプログラムではコミュニケーション・カリキュラムにおける教育方法に3つの方法を挙げている。1つ目が構造化された指導、2つ目が偶発性指導法、3つ目が環境を利用した方法である。

2. 研究目的

本研究では構造化された指導によって、きわめて重度の自閉症幼児一事例に対してコミュニケーション指導を行い、要求表現が自発的になされることを目的とした。

3. 研究方法

知的障害児通園施設に在籍する自閉症児1名（以下A児）を対象に指導を行った。指導を行う前に、PEP-3とコミュニケーション・サンプルから得られ

たデータを元に短期目標①と短期目標②を立て、短期目標①では絵カードを渡す要求表現を習得することとした。短期目標②は、コミュニケーションの相手を変化しても短期目標①と同様に要求できることとした。

4. 研究結果及び考察

短期目標①は7回のセッションで達成した。短期目標②は3回のセッションで達成した。このように達成した要素として次のものが挙げられる。まず要求表現を絵カードにした上でやり取りを行うことにした。したがってコミュニケーションのやり取りが視覚化された。このため、A児は視覚的にコミュニケーションの因果関係を理解しやすい状況になったと考えられる。また、これを1セッションに10試行繰り返し行うことで、具体的な経験による学習を行うことができた。これらにより、A児は絵カードを渡す要求表現を習得し、それをコミュニケーションの相手を変化しても要求できるようになった。このことから、A児が要求表現を自発的に行うことができるようになったと考えられる。